愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅱ
―猿投窯東山地区及び尾北窯出土須恵器・瓷器の考古学的調査
（付）美濃・伊勢の窯跡出土須恵器―

大西 遼
（愛知県陶磁美術館　学芸員）

はじめに

愛知県は、古墳時代中期に国内屈指の古窯群である猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）が開窯して以降、連綿と窯業生産を展開してきた地域である。日本全国を見ても、愛知県のように古墳時代から現在に至るまで、連綿と生産史を追うことのできる地域はない。とりわけ本稿で扱う猿投窯及び尾北古窯跡群（以下、尾北窯）を要する尾張地域は、両窯が廃絶して以降も瀬戸窯・常滑窯等へと窯業技術を継承し、生産活動を断絶することがなかった、極めて稀有な地域である。

県下の窯業遺跡は、各時代の生産活動の様相を現代に伝えるものであり、当地の窯業史のみならず日本陶磁史の基礎資料として極めて貴重な情報を内包している。考古学的に窯業遺跡の研究を行う上で最も有力な資料は、層位的な情報を得ることのできる発掘調査により出土した資料であることは明らかであり、編年をはじめとした猿投窯・尾北窯の研究もこれらの資料を中心に進められてきた。一方で発掘調査を経ることのなかった分布調査による地表面採集資料（表採資料）は、その生産品目や時期とともに分布論的研究において重要な資料となってきたが、実測図の提示をはじめ、資料の具体的な様相が示されることは少なかったのではないだろうか。こうした資料の様相を具体的に把握した上で、これまでの編年研究・分布論的研究、あるいは技術系譜等に関する研究を踏まえることで、今後の愛知の窯業遺跡研究をより進展させることができると考えている。

以上のような問題意識のもと、前項では平成 28・29 年度（2016・2017）に実施した愛知県陶磁美術館所蔵・保管資料を中心とした実測調査を踏まえ、猿投窯東山地区及び尾北窯篠岡地区出土の須恵器・瓷器の概要と、その編年上の位置を報告した（註１）。本稿では、引き続き猿投窯東山地区・尾北窯出土の須恵器・瓷器について、平成 30 年度（2018）に実施した愛知県陶磁美術館保管資料の実測調査成果を踏まえ、概要報告を行う。なお本稿では、『愛知県史』（別編　窯業）により示された編年を使用し、各窯の編年的位置付けを行った（註２）。

１．猿投窯東山地区の瓷器窯（図 1）

（１）東山 57 号窯（Ｈ－57 号窯）（図 3）

白瓷が出土している。１～３は椀で、２には灰釉の浸けがけが確認できる。１の底部には回転糸切痕が残る。

百代寺窯式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（２）東山 70 号窯（Ｈ－70 号窯）（図３）

白瓷が出土している。４は椀、５は輪花椀である。４の底部には回転糸切痕が残る。

尾張型３型式に比定できる。東山 70 号窯（名古屋市千種区田代町字瓶杁）は百代寺窯式とされているが（註３）、東山Ｇ－70 号窯（Ｈ－Ｇ－70 号窯、徳川山町窯、名古屋市千種区徳川山町１丁目）は尾張型３型式とされている（註４）。そのため、本資料は百代寺窯式よりも尾張型３型式に近いと考えられるため、東山Ｇ－70 号窯の出土品である可能性を想定しつつも、注記を重視し東山 70 号窯出土品として考えたい。愛知県陶磁美術館保管。

（３）東山Ｇ－37 号窯（Ｈ－Ｇ－37 号窯）（図３）

白瓷が出土している。６は椀、７は小椀である。６・７の底部には回転糸切痕が確認できるが、６はナデ消しを行っている。６の高台には籾痕があるが、ごく少ない。

尾張型３型式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（４）東山Ｇ－76 号窯（Ｈ－Ｇ－76 号窯）（図３）

白瓷が出土している。８は椀、９は小椀である。８の底部には回転糸切痕が残る。

尾張型４型式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（５）東山Ｇ－49 号窯（Ｈ－Ｇ－49 号窯）（図３）

白瓷が出土している。10 は輪花椀、11・12 は椀、13 は小椀である。11～13 の底部には回転糸切痕が残る。11・12 の高台には籾痕が残るが、12 はわずかに確認できるのみで、籾ではなく茎等の可能性もある。

尾張型４型式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（６）東山Ｇ－25 号窯（Ｈ－Ｇ－25 号窯）（図３）

白瓷が出土している。14・15 は椀、16 は小椀である。14・15 の底部には回転糸切痕が残り、16 は回転糸切痕をナデ消している。14～16 の高台には籾痕があるが、16 は 14・15 と比べてかなり少ない。

尾張型４型式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

2. 尾北窯篠岡地区の瓷器窯（図 2）

（１）篠岡 17 号窯（Ｓ－17 号窯）（図４）

白瓷、須恵器が出土している。白瓷には灰釉椀（17・18）、灰釉皿（19）、灰釉無台椀（20）がある。須恵器には鉄鉢（21）がある。白瓷は全て刷毛塗りにより灰釉を施釉しており、17～19 は見込にも一刷毛施されている。20 は内面のみ灰釉がかけられており、底部に回転糸

切痕を残す。

黒笹 90 号窯式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（２）篠岡 19 号窯（Ｓ－19 号窯）（図４）

白瓷、青瓷素地と考えられるもの、須恵器が出土している。白瓷には灰釉椀（23)、灰釉皿（22）がある。22・23 とも刷毛塗りによる施釉と考えられ、22 は高台内面、底部以外の全体を、23 は残存部の内外面に灰釉がかけられている。24 は青瓷素地と考えられる皿、灰～灰白色を呈する。青瓷素地としては胎土が粗く、ミガキが施されないため、須恵器の可能性も考えられるが、内面の調整にコテが使用されていると考えられることに加え、高台形が須恵器ではなく青瓷素地に近いことから、青瓷素地として表記した。ただし先の胎土やミガキが無いことに加え、口縁端部が外傾する面取がなされた形となるなど、青瓷素地とする際の違和感もある。今後の検討課題としたい。須恵器には壺・瓶類の体部がある（25)。

黒笹 90 号窯式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（３）篠岡 31 号窯（Ｓ－31 号窯）（図４）

白瓷、須恵器が出土している。白瓷には灰釉椀（26～28）があり、体部から口縁部にかけての内外面に灰釉が刷毛塗りされている。28 は見込にも一刷毛施されている。29 は擂鉢と考えられ、灰釉こそ施されないが黄灰白を呈する素地には白味が強く、須恵器よりも白瓷の焼き上がりに近い。須恵器には、獣足壺等に付随する獣足がある（30)。

黒笹 90 号窯式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（４）篠岡 42 号窯（Ｓ－42 号窯）（図４）

白瓷が出土している。31・32 は灰釉椀、33 は灰釉稜椀、34～36 は灰釉皿、37 は鉢、38 は瓶類体部である。31～36 は、体部から口縁部にかけて内外面に灰釉が刷毛塗りされている。37 は無釉である。38 は外面に灰釉が施される他、内面に文字のヘラ書きのようなものが認められるが判読はできず、内面に施される点でも異質である。

黒笹 90 号窯式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（５）篠岡Ⅱ－８号窯（Ｓ・Ⅱ－８号窯）（図５）

本窯は、現在の遺跡名でどの窯に該当するのか不明である。白瓷が出土している。39・40 は灰釉椀、41 は無釉の椀である。39・40 は体部から口縁部にかけて灰釉が刷毛塗りされている。39 は見込にも一筋刷毛塗りされている。

39・40 は黒笹 90 号窯式、41 は尾張型３・４型式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（６）篠岡 16 号窯（Ｓ－16 号窯）（図５）

白瓷と須恵器が出土している。白瓷には灰釉椀がある（42～44)。42 は体部から底部にか

けて灰釉が刷毛塗りされているが、43・44 の残存部には灰釉が確認できず、より口縁部側に灰釉が施されていたものと思われる。43 は底部に回転糸切痕が残る。須恵器には甕体部片があり、外面は平行タタキ痕、内面は無文である。内外面とも、焼成後黒色に発色するものを刷毛塗りしている。

42 は黒笹 90 号窯式、43・44 は折戸 53 号窯式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（７）篠岡 6 号窯（Ｓ－６号窯）（図５）

白瓷が出土している。段皿（46）と椀（47）があるが、いずれも残存部に灰釉の痕跡やミガキなどは認められない。46 は焼成が甘く、47 もやや甘い。47 は底部に回転糸切痕を残す。

折戸 53 号窯式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（８）篠岡 12 号窯（Ｓ－12 号窯）（図５）

白瓷と須恵器が出土している。白瓷には灰釉椀（48・49)、須恵器には擂鉢等の口縁部がある（50)。48 は灰釉が浸けされている。

折戸 53 号窯式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（９）篠岡 27 号窯（Ｓ－27 号窯）（図５）

白瓷と窯道具が出土している。白瓷には、浸けがけにより灰釉を施す灰釉椀（51・54～56）と灰釉皿（52～53）がある。窯道具にはツクがあり、底部には糸切痕が残る（57)。

概ね東山 72 号窯式に比定できるが、一部 54 や 56 等、折戸 53 号窯式に遡り得る要素が認められるものがある。愛知県陶磁美術館保管。

（10）篠岡 14 号窯（Ｓ－14 号窯）（図５）

白瓷が出土している。59 は灰釉椀、59 は灰釉皿、60 は灰釉段皿である。いずれも灰釉が浸けがけされている。

59・60 は東山 72 号窯式に比定できるが、58 は折戸 53 号窯式に相当するものと思われるやや古式の要素を持つ。愛知県陶磁美術館保管。

（11）篠岡 24 号窯（Ｓ－24 号窯）（図６）

白瓷と須恵器、窯道具が出土している。白瓷には灰釉椀（61・63・69・70)、灰釉皿（62)、段皿（64)、鉢（67)、不明製品（72）がある。61・63・69・70 は浸けがけ、62 は刷毛塗りにより灰釉が施される。64 は生焼けのためか灰釉がはっきりとせず、67・72 は自然釉のみである。70 は底部に回転糸切痕が残り、高台には籾ではなく茎のような植物質の跡がいくつか認められる。須恵器には杯蓋（65)・甕（71）があるが、数も少なく混入と見られる。71 は外面に平行タタキ、内面に無文当具の年輪が浮き出した痕が認められる。窯道具には

三叉トチン（68)、転用窯道具と考えられるもの（66：無台杯身転用）がある。三叉トチン（68）は、他の出土品との年代的齟齬があることから混入と見られる。

先述した明らかに混入と思われるものを除いても、概ね黒笹 90 号窯式～百代寺窯式と幅のある資料群である。愛知県陶磁美術館保管。

（12）篠岡 29 号窯（Ｓ－29 号窯）（図６）

白瓷が出土している。73・74・77 は椀、76 は輪花椀、78・79 は小椀である。75 は生焼けの無台椀だが、他の白瓷と同時期のものか、あるいは古代の須恵器窯からの混入かは定かでない。73・74・77～79 の高台には籾痕が認められるが、73・78 極めて少ない。77・75 の底部は回転糸切痕を残す。

尾張型３・４型式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（13）篠岡 22 号窯（Ｓ－22 号窯）（図６）

白瓷と須恵器、青瓷素地の可能性のあるものが出土している。白瓷には椀がある（81)。須恵器には壺・甕体部の小片があるが、混入と考えられる（82)。83 は青瓷素地の可能性があり、色調は褐灰色で、青瓷素地としては標準的な焼き上がりをしている。器種としては香炉脚部の可能性が考えられようか。ただし、残存部にはミガキが認められず疑問が残る。緑釉香炉の素地だとすると、時期的に他窯からの混入と思われる。

白瓷は尾張型３・４型式に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

３．尾北窯今井地区の瓷器窯（図 2）

今井地区の中で今井窯（犬山市）とされる窯の資料を取り上げる（図７)。現在の遺跡名でいずれの窯に該当するのかは不明である。ただし、「中峠」の注記や貼紙があるものが数点あり、中峠 1・2 号窯等が候補に考えられる。

白瓷が出土している。84 は灰釉蓋、85 は灰釉鉢、86～88 は灰釉椀、89 は灰釉皿、90 は灰釉段皿、91 は灰釉長頸瓶、92・93 は灰釉が施された瓶類である。84 は外面、85 は内面、92 は内面のみ灰釉が施される。86～88・90 は灰釉を刷毛塗りし、89 は浸けがけする。

概ね黒笹 90 号窯式に比定できるが、灰釉が浸けがけされる灰釉皿（89）等もあり、一部折戸 53 号窯式に比定できる資料も含む。当資料の器面・断面は磁器と見まがうような焼き上がりを見せ、器壁の薄さも目立つ。地理的にも東濃窯の製品との比較調査を行う必要がある。愛知県陶磁美術館保管。

おわりに

以上、猿投窯東山地区と尾北窯篠岡地区・今井地区に属するいくつかの窯について、出土資料の概要と時期比定について述べた。最後の２点程、所見と課題について述べておきたい。

まず、Ｓ－27 号窯とＳ－24 号窯の編年的位置付けについてである。Ｓ－27 号窯は尾北窯

の編年において、Ｓ－27 号窯式（広久手Ｃ3 期：Ｈ－72 号窯式に対応）の標識窯とされたものである[5]。しかし、52～54・56 のように、体部下半に回転ヘラ削りを施すやや古手の手法が残る。Ｓ－24 号窯は前記Ｓ－27 号窯式に属するものとして紹介されたものである[6]。61・62・68・71 等は当窯式期よりも遡る要素が多分に見られるが、混入の可能性もある。また 69・70 は断面三角形の高台を有し、底部も厚手である等、百代寺窯式の特徴を持つ。資料内容に幅があり注意の必要な窯であるといえるだろう。尾北窯の編年における標式となる２窯だが、今後再検討の余地があるかもしれない。

次に尾北窯について、前稿[7]と本稿で扱った窯をまとめて所属時期を整理したものが表１である。岩崎 41 号窯式から高蔵寺２号窯式にかけてと、折戸 10 号窯式から折戸 53 号窯式にかけて、尾北窯の操業が活発化したことを改めて確認できる。詳細な分析・検討については、別稿に期したい。今後も猿投窯をはじめとする須恵器・瓷器窯出土資料の調査を継続していく予定である。

（続く）

（付１）美濃の窯跡出土須恵器―丸山窯（図７）

岐阜県美濃市の丸山窯出土須恵器について、一部実測調査を行ったので実測図の提示を行う。丸山１号窯・丸山３号窯・丸山４号窯は全て猿投窯系の蓋杯で、岩崎 101 号窯式に比定できる。丸山２号窯は猿投窯系蓋杯と非猿投窯系蓋杯が出土しており、猿投窯系蓋杯は東山 15 号窯式から岩崎 101 号窯式に比定できる。詳細な分析・検討は別稿に期したい。

（付２）美濃・伊勢の窯跡出土須恵器―久居窯（図８）

三重県津市の久居窯出土須恵器について、一部実測調査を行ったので実測図の提示を行う。久居窯出土品は基本的に大阪府陶邑窯系の須恵器である[8]。久居３号窯は概ねＴＫ47 型式に類する形態のものが出土しているが、一部ＭＴ15 型式以降の形態のものが出土しており注意が必要である。甕体部には内面に同心円当具の痕跡を持つものと無文のものがある。久居４号窯も概ねＴＫ47 型式に類する形態をとなるが、久居３号窯出土品との関係も想定し編年的位置付けを考える必要がある。甕体部には内面に同心円当具の痕跡を持つものと無文のものがある。今後その他の出土品を踏まえて詳細に分析を行い、陶邑窯の資料との比較検討等を通して、資料的位置付けを改めて考えたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、浅田博造氏に資料についての御教示をいただきました。末筆ながら深謝申し上げます。

［註］

（1）大西遼 2018「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅰ―猿投窯東山地区及び尾北窯篠岡地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査―」『愛知県陶磁美術館　研究紀要』23　愛知県陶磁美術館。

（2）愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系　愛知県。愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系　愛知県。

（3）愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系　愛知県。

（4）愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系　愛知県。

（5）齊藤孝正 1981「尾北窯における灰釉陶器の変遷」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ　小牧市篠岡古窯址群』愛知県建築部・小牧市教育委員会。

（6）註 5 文献。

（7）註 1 文献。

（8）以下陶邑窯編年として以下を用いた。田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店。

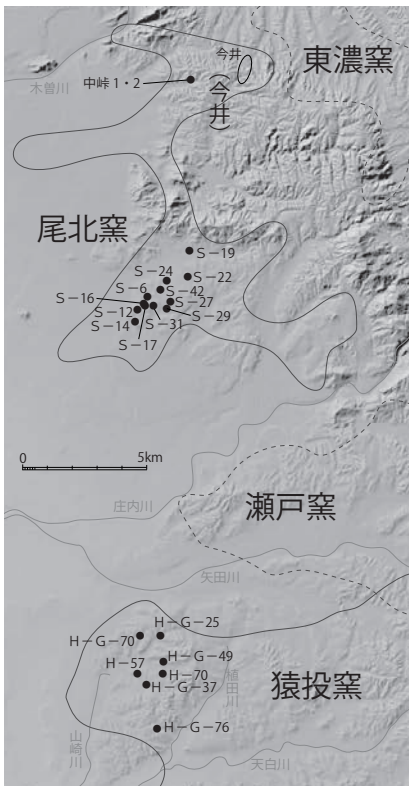

図１　本稿で扱う猿投窯東山地区、尾北窯の窯跡（地理院地図色別起伏図（国土地理院）、註３・４文献をもとに作成。）

表１　愛知県陶磁美術館所蔵・保管の尾北窯出土須恵器・瓷器の所属時期

窯跡名	Ｉ－17	Ｉ－41	Ｃ－2	Ｉ－25	ＮＮ－32	Ｏ－10	Ｋ－14	Ｋ－90	Ｏ－53	Ｈ－72	百代寺	尾張3	尾張4
Ｓ－78号窯	■												
Ｓ－46号窯			■				□						
Ｓ－68号窯	■	■											
Ｓ－18号窯	■	■	■										
Ｓ－81号窯			■	■									
Ｓ－41号窯		■	■						□				
Ｓ・Ｖ－4号窯		■	■										
Ｓ・Ⅱ－9号窯			■										
Ｓ－23号窯			■										
Ｓ－43号窯						■							
Ｓ－10号窯													
Ｓ－34号窯						■	■						
Ｓ－20号窯						■							
Ｓ－42号窯						■						■	
篠岡高根窯						■	■						
Ｓ－89号窯						■	■						
Ｓ－84号窯						■		■					
Ｓ－83・84号窯						■							
Ｓ－32・33号窯						■	■		■				
Ｓ－47号窯							■						
Ｓ－17号窯								■					
Ｓ－19号窯								■					
Ｓ－31号窯								■					
Ｓ－42号窯								■					
Ｓ・Ⅱ－8号窯								■				□	□
今井窯								■	□				
Ｓ－16号窯								■	■				
Ｓ－6号窯									■				
Ｓ－12号窯									■				
Ｓ－27号窯									?	■			
Ｓ－14号窯									■	■			
Ｓ－24号窯							□	■	■	■	■		
Ｓ－9号窯			□							■	■		
Ｓ－29号窯												■	■
Ｓ－22号窯													■

※列のラベルは窯式名の略表記。Ｉ－17（岩崎17号窯式）、Ｉ-41（岩崎41号窯式）、Ｃ－２（高蔵寺２号窯式）、Ｉ－式）、ＮＮ－32（鳴海32号窯式）、Ｏ－10（折戸10号窯式）、Ｋ－14（黒笹14号窯式）、Ｋ－90（黒笹90号窯式）、Ｏ式）、Ｈ－72（東山72号窯式）、百代寺（百代寺窯式）、尾張３（尾張３型式）、尾張４（尾張４型式）

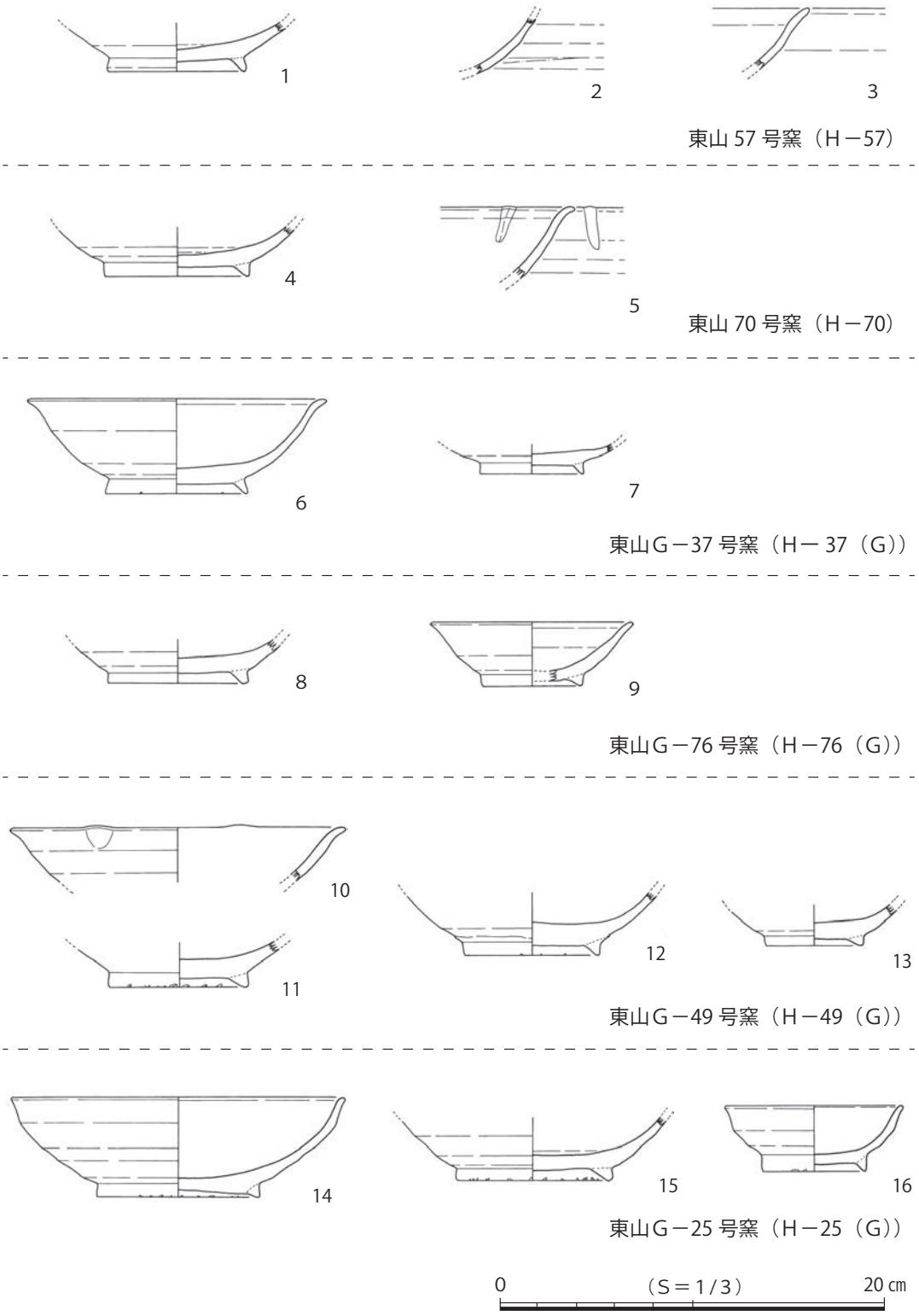

図２　猿投窯東山地区出土白瓷（愛知県陶磁美術館保管）

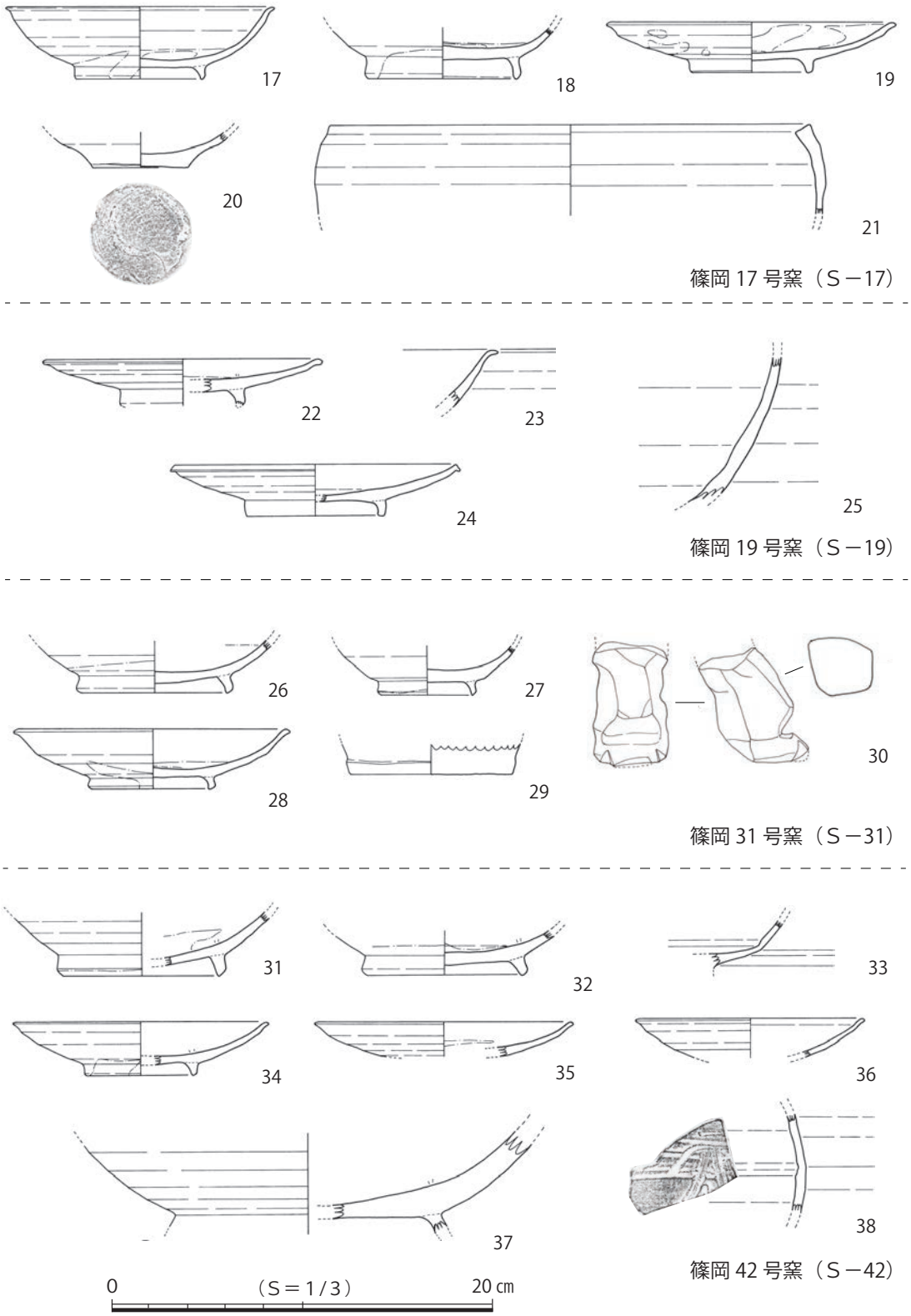

図３　尾北窯篠岡地区出土瓷器・須恵器①（愛知県陶磁美術館保管）

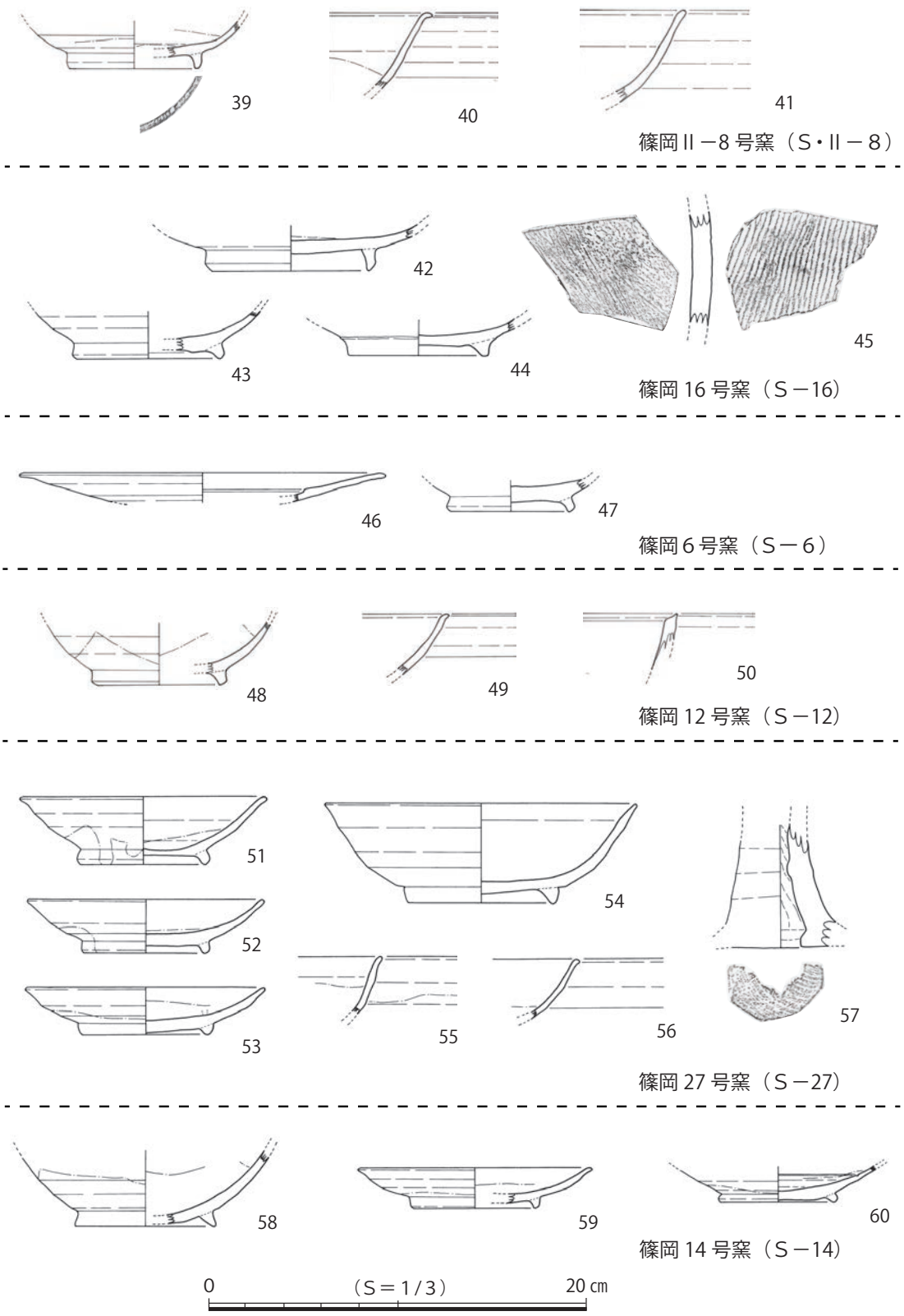

図4　尾北窯篠岡地区出土瓷器・須恵器②（愛知県陶磁美術館保管）

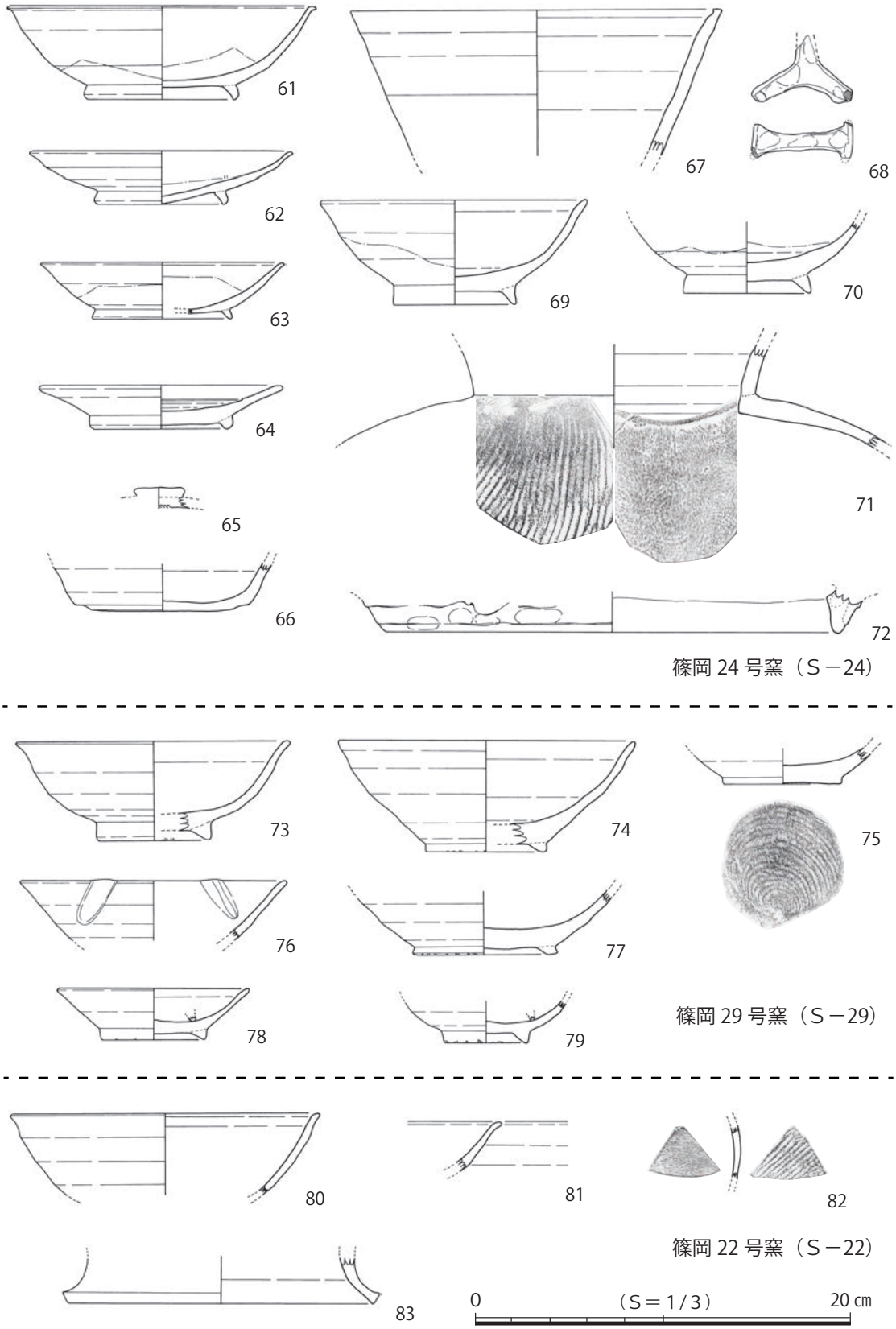

図 5　尾北窯篠岡地区出土瓷器・須恵器③（愛知県陶磁美術館保管）

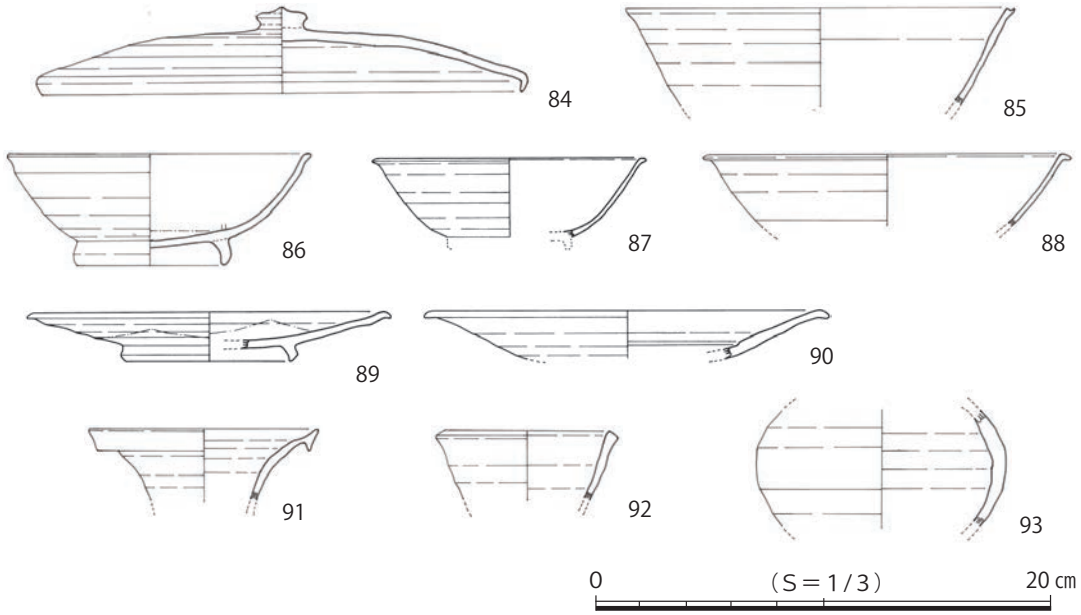

図６　尾北窯今井地区出土白瓷（今井窯）（愛知県陶磁美術館保管）

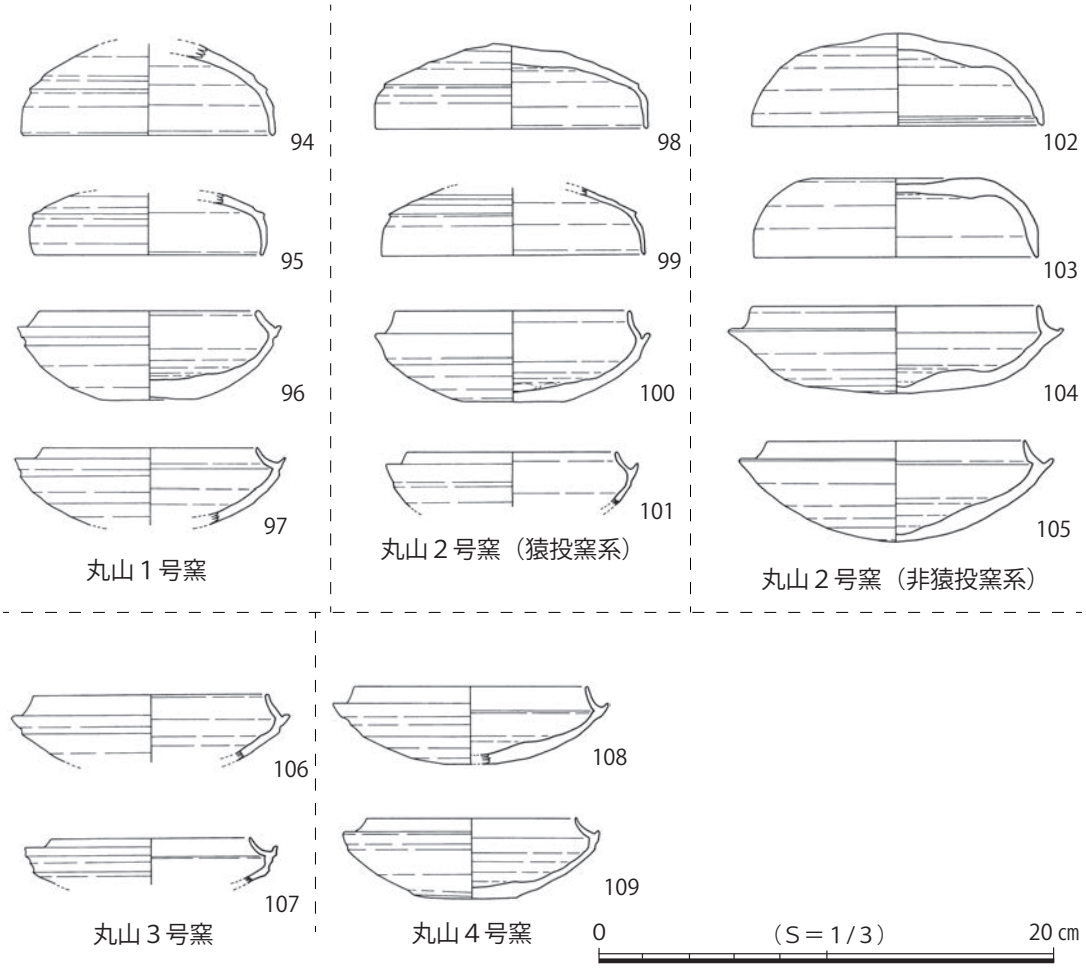

図７　（付１）美濃　丸山窯出土須恵器（愛知県陶磁美術館保管）

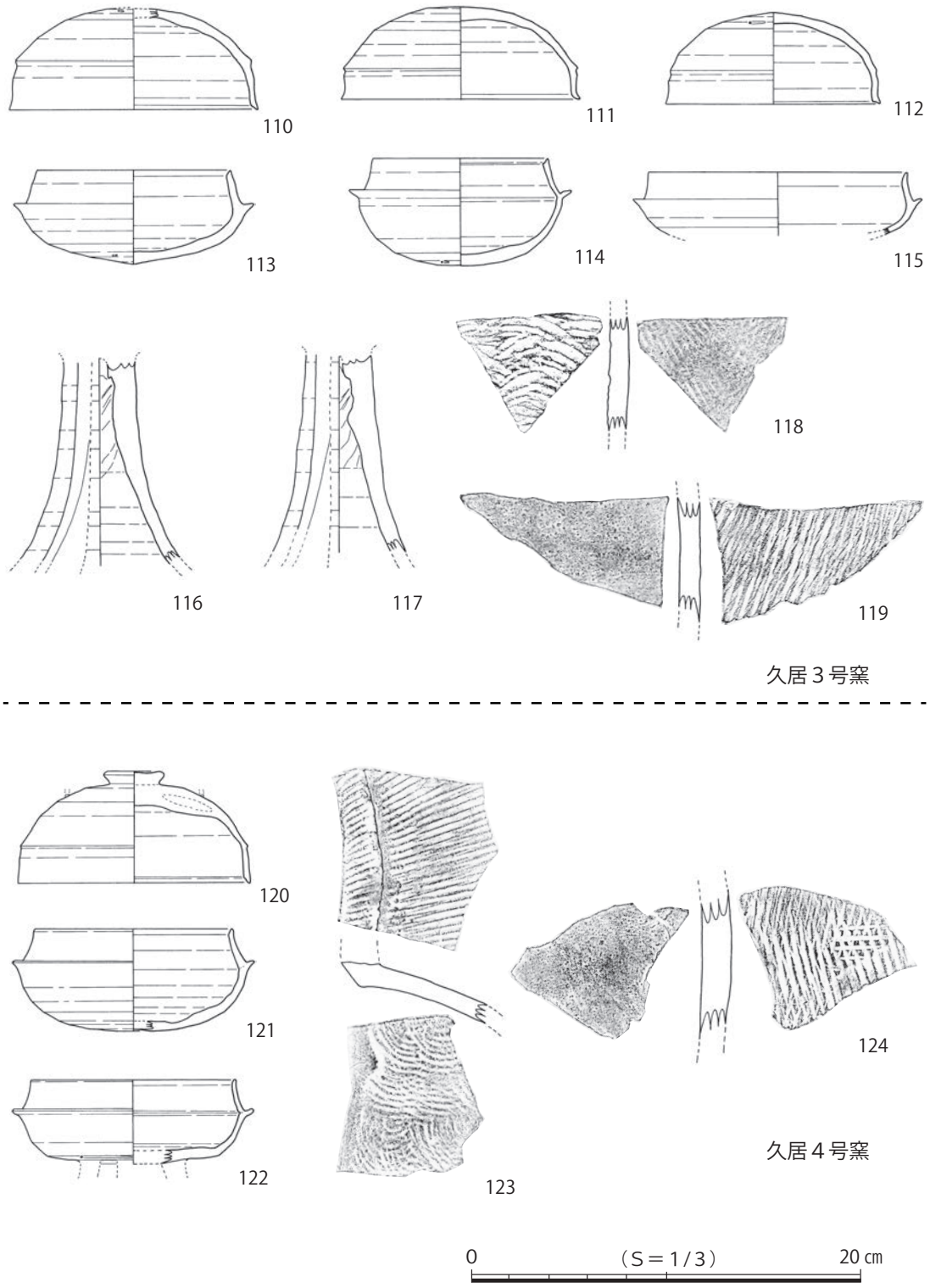

図８　（付２）伊勢　久居窯出土須恵器（愛知県陶磁美術館保管）